

第四号：第一首～第二十九首

天理教の信仰は「道」に喩えられるが、自らが歩んでいる道が「よく分からない」場合、勢いよく進むことは難しい。そこで「おふでさき」第四号は、この「よく分からない道」の「行き先」について述べることから始めている。

「現在の道は何の道だと思っているのか。何かよく分からない道のようなではあるが、先には大きな道が見えている。もう、あそこにあると言っているうちに、眼の前に現れてくる。それがいつの日かと思っているだろうが、五月五日に確かに現れてくる。それから、神に救ってもらったと御礼参りする者が夜昼別なくやって来る。そして、だんだんと六月になったなら、親里に帰ってきた証拠として神符を出そう。それからだんだんと『中南の門屋』の普請を急がせて、何かと忙しいことになってくるのだ」(四号1～6)。

「五月五日」とは、『注釈』によれば、「かぐら面」を迎えにいった日であり、また、病臥中の信者(山沢良助、山中忠七及び前川たぎ)が、教祖が予め述べていたように「元のちば」に参って来た日である。つまり、「つとめ」に必要な道具と人材が符号した日である。また、「証拠守り」と呼ばれる神符は明治7年6月から下付されて、また、主に教祖の住居として使用される「中南の門屋」という建築物も翌明治8年に竣工し、「よく分からない道」が何かと「眼に見えて」変化している様子がかがえる。

このように「よく分からない道」は「大きな道」(往還道、往来の盛んな広い道)へと続いていくのであるが、それは言い換えれば「御礼参りする者が夜昼別なくやって来る」ように大勢の人がついてくる道である。次の一連の歌では、その日が親神にとって実に楽しみであることが察せられる。

「これから先、神の心が日々急いでいることを知っていてくれ。ただし、どんなに急いでいても、口では決して何も言わない。今後沢山の人が慕い来るのが見えていると、早く知らせておこうと思っはいるのだが…。だんだんと思も掛けないような珍しい人が見えているが、誰にもこれが見えないのだろうか。今後の話として、沢山の道を見ていよ。珍しい道が現れてくる。面白いではないか、多くの人が『天の与えだ』と言っは元の場合に参るようになる。日々に身の上に障りが付いて、『また来たか、神が待ちかねていることも知らずに』というようになってくる。だんだんとつとめを勤める人手も揃えば、これを合図にして何もかも始める」(四号7～14)。

親神の眼には沢山の人がこの道を歩む様子が見通されており、「早く知らせておこうと思っはいるのだが」「誰にもこれが見えないのだろうか」と述べて、先にある楽しみを早く見せてやりたい気持ちを吐露されている。ちなみに、「おふでさき」全号を通じて「面白い」という表現はこの箇所だけであり、神の待ちかねている気持ちがなお一層感じられる。ところが、我々人間はとにかく人の影響を受けやすく、その場の空気に流されやすい。とりわけ、権威ある者が人々に与える影響は甚大であり、親神はそのような事態を憂いて次のように歌っている。

「日々に、神の心をだんだんと上に立つ人々に知らせたことなら…。そのような人々は何も知らずいまだ教えを知らない人

に従っているが、それが不憫である。日々神が急いでいるのは、教えを知らない者がすつきり心を入れ替えることであり、それを待っている。以前の牛疫の兆しを考えてみよ。それを見て、上に立つ者は皆気を付けよ。神の言うことが現れてきた事なら世界中の人の心が勇んでくる。何でも世界の心が勇むなら、それに応じて神の心も勇み立つ」(四号15～20)。

「牛疫」について、『注釈』では、「古老の言によれば、大和地方に嘗て急性の牛疫流行して、またたく間に多くの牛がたおれ、その翌年になって、疫病しょうけつを極めたという事である」と説明されている。牛疫とは極めて強い伝染力を示す牛の感染症(病原性の微生物が体内に侵入することで引き起こされる疾患)であり、発熱、食欲不振、動作緩慢、粘膜の充出血などの症状を伴うものとされる。また、我々の身近な感染症としては風邪、食中毒、水虫、麦粒腫(ものもらい・めばちこ)などが挙げられ、さらに人類の存続を脅かすような大流行(パンデミック)としては14世紀のペスト(ヨーロッパの全人口の4分の1である2,500万人が死亡)、15世紀の天然痘(アメリカ大陸において50年間で人口が8,000万人から1,000万人に減少)などが歴史上有名であり、最近でも2009年の新型インフルエンザでは世界中で1万8,449人の死亡が報告され、さらにマラリアは年間3～5億人が感染し、100～200万人が死亡しているとされている。「おふでさき」ではコレラや瘧疾(天然痘)にもふれられているが、感染症が猛威を振るう状況を想像するだけで、これらの歌が扱っている事柄の重大さが感じられる。

さて、「おふでさき」はこのように上に立つ人々についてふれた後、我々が歩む道について再び述べられて、神が「待ちかねている」人材をどのようにして集めるのかについて改めて示されている。

「今日の日をどういう道と思っているのか、珍しいことが見えてくる。だんだんに何でも見えてくるから、どのような道もすべて楽しんでくれ。日々に陽気づとめの手を覚えてくれれば、神の楽しみはどれ程のことであろうか。つとめを勤める人が一日も早く集まるのを待ちかねている。神のこの心を知らずに、そばにいる者は一体何を考えているのか。何であっても病気というものはなく、身の上に障りがあるのは、神が用事に使いたいということである。ただし、用事といっても何事かはちよつとは分からないだろう。神の思惑は沢山ある。しかし、何もかも神が思っていることをすつきり説いたなら心が勇んでくる。そして、だんだんと何についても神の思惑を説き尽くせば、身の悩みもすつきり治る。それから先は、陽気づとめを待ちかねている。何のことかといえば、かぐらづとめのことである」(四号21～29)。

神が「この人」と思って見定めた人には、その身の上に何らかの障りを見せて、この道を歩むきっかけを与える。何も知らない人間にしてみれば、それは「病気」であるが、神にしてみれば「手引き」である。病気が「すゝやかになる」(健やかになる)のは、人間が「病気」を「手引き」と受け止め、そこに込められた神の深い思惑を納得することによって為されるのである。